

雪の白峰

小島烏水

青空文庫

アルプスに Alpine Glow（山の栄光）という名詞がある、沈む日が山の陰へ落ちて、眼にも見えなくなり、谷の隅々隈々に幻の光が、夢のように彷徨い、また消えようとすると、二、三分の間、雪の高嶺に、鮮やかな光が這って、山の三角形的天辺が火で洗うように耀く、山は自然の心臓から滴れたかと思う純鮮血色で一杯に染まる、まことに山の光榮は落日である、さればラスキンも『近世画家論』第二巻に、渚へ寄する泡沫と、アルプス山頂の雪とは、海と山とを描いて、死活の岐れるところだというような意味で書いてある、落日より億万の光線を吸収して、その一本一本に磨きをかけるのは、山の雪である、アルプスばかりではない『甲斐国志』にも、白峰の夕照は、八景の一なりとある、山の雪は烈しい圧迫のために、空気泡を含むことが少ないから、下界の雪のように、純白ではない、しかも三分の白色を失って、三分の氷藍色を加え、透明の微小結晶を作って、空気の中に、澄徹に沈んでいる、群山の中で、コバルト色の山が、空と一つに融ければとて、雪の一角は、判然と浮び上る、碧水の底から、一片の石英が光るように。

蒼醒めて、純桔梗色に澄みかえる冬の富士を、武蔵野平原から眺めた人は、甲府平原またはその附近の高台地から白峰の三山が、天外に碧い空を抜いて、劃然と、白銀の玉座

を高く据えたのを見て、その冴え冴えと振り翳す白無垢衣の、皺の折れ方までが、わけもなく魂を織り込もうとするのに魅せられるであろう、水を打ったように肅んみりとした街道の樹も顫え、田の面の水も、慄然として震えるような気がするであろう。

自分は甲斐精進湖に遊んで、その近傍の山から、冬の白峰を見たことを、鮮やかに記憶している、空線の上に、夢みる巨人は、下界の水平線上、青春の国の炎の中で、夢を見ている自分と、向き合った、彼の夢には冷たけれども光があつた、自分の夢は、彼に吸収されていつしか化石のような自分を融かしてしまった、自分は無意識に古人の言つたことを繰り返す、「北に遠ざかりて雪白き山あり」もうそれでよい、ただ白峰でよい。

雪によつて名を得たものに、飛驒山脈の大蓮華山、また白馬岳があるし、蝶ヶ岳もある、しかし虚空に匂う白蓮華も、翅粉谷の水脈より長く曳く白蝶も、天馬空を行かず、止まつて山の肌に刻印する白馬も、悉く収めて、白峰の二字に在る、「北に遠ざかりて（何等の神秘）雪白き山あり（何等の高潔）」即ち白峰である、何という透き通った感じのする山であろう、この外に美しい名もなければ、涼しい名もない、やさしい名もなければ、威厳ある名もない。

自分は昨年塩山の停車場で、白ペンキ塗の広告板に、一の宮郷銘酒「白嶺」と読んで、

これは「雪の白酒」ではあるまいか、さぞ芳烈な味がすることであろうと思った、また他で製糸所の看板に、白嶺社とあるのを見て、この社の糸の光には、天雪の輝きがあろう、衣に織つたらばさぞ、と考えたことがある。

白峰は幾峰にも分れている、が殊に北の三山、北岳、間の岳、農鳥山は高さにおいて、姿態において、白峰全山脈を代表している、その中でも農鳥山の名を忘れてはならぬ、一体甲府辺の人たちは、春の田植えや、また秋の麦蒔きなどを、「農をする」といつている、この二期には、山の雪が消え残つたり、また積もり初めるときで、綿の入った厚い峰の白妙衣が、綻び出したり、また縫い初められる、そのとき鳥の形が、農鳥山の頂上より、直下、少しも左右に偏することなく、胸壁の上に印せられるので、この鳥形が見え初めると、農にかかるから、農鳥山の名を獲たともいう、殊に晩春から初夏へかけての鳥形は、実に分明なるものであるという、「農鳥」というのは、鶏の義であるそうだが、事実残雪は、鶏とは見えない、無風流な農夫は、自分に説明して、シャモの雄おどり鳥の立っているように、段々雪が融けると、尾が消え、腹が撈むしられ、耒すきのような形をして、消えてしまうと語った、白い鳥は消えても、注意して見ると、岩壁い巖かめしい赭あかい色の農鳥は、いつ、いかなる時でも、おそらく山が存在する限りは、見えているだろう。（あるいは農鳥というのは、農

鳥山の麓近い沢に、雪の消えた跡へ、黒く出る岩で、卵を三つも持って、現われるという、言い伝えもあるそうだ。）

山の雪が動物の形態となつて消え残ることは、何か因縁話があるのかは知らぬが、殊に中央日本の山に多いようである、自分の知った限りでも、前記の蝶ヶ岳、白馬、大蓮華の外に、先ず東海道から見た富士山の農男（馬琴の『羈旅漫録』巻の一、北斎の『富嶽百景』第三編に、その図が出ている、北斎のを茲^{ここ}に透き写す、これで見ると、蝶や農鳥は、雪がその形をするのだが、農男は、雪に輪を取られた赭岩が、人物の格好に見えるらしい）は、名高いものであるが、甲府方面からは、富士の「豆蒔小僧」というのが見える、八十八夜を過ぎて、豆を蒔く頃になると、あの辺の農夫は、額に小手を翳して、この小僧を仰ぐものだそう、それは小僧が二人連れ立つて、一人は笠を冠り、一人は片手を挙げて、豆を蒔く形をしているので、同じく雪に輪廓を取られた岩が、そういう形に見えるのである。殊に越後には最も多い、妙高山の「農牛」は、甲斐鳳凰山（実は地藏岳の方にあるので、牛は首を北に向け、尾の方を少し高くしている、甲府から見ても、一間位の大きさに見えるそうである）と同じであるし、焼山の蝙蝠^{こうもり}は、糸魚川^{いとがわ}方面からは、分明に見えるというし、米山に鯉^こがあらわれると、魚が漁^とれないという諺もある、頸城^{くびき}郡の黒姫山の寝牛、

同じく白鳥山の鳥など、雪の国だけあって、山と雪の関係は、何か神話の材料にでもなりそうである。友人辻本工学士に拠ると信濃越中の国境に聳えている祖父ヶ岳は、「種蒔き爺さん」が箆ざるを持った具合に現われるので、山腹雪解の頃、偃はいまつ松が先ずその形に蔓ひろがつて、出るのではないかという話である、偃松の仲間入は最もおもしろい。

農鳥山の鳥形の美うるわしいことを、自分に説いてくれたのは、前に引合に出した友人N君である、N君は早稲田文科の出身で、創作に俊秀の才を抱きながら、今は暫く峡中で書を講ずるの人となっている、自分はN君の通信から、ここに二通を抜く、殊に手紙に添えて、送られたN君のスケッチは、頗すこぶる緻密なもので、小さい雪の斑点まで、洩もらされなかったのであるという。

白峰より彼鳥かのを奪わば、白峰は形骸のみとならんとまで、この頃は飽かず、眺め居おりそ候うろう、……白峰の霊を具体せるものは、誠にこの霊鳥の形に御座候、前山も何もあつたものにあらず、東南富士と相對して、群山より超越せる彼巨人の額に、何ものの覆うものなく、露出せる鳥の姿、スカイラインよりは、僅わずかに一尺も低かるべきか、農鳥の農の字が平野的にて、氣に入らず、また決して鶏とは見えず、首長きところよりも

紛^{まじ}う方なき水鳥に候、埴輪の遺品に同じ形の鳥と見給うべし、水掻きまであり、高さここより見て、一間も候べきか、甲府附近を、最も觀望宜しき場処と存候。

誠に晩春より初夏へかけ（この赤裸々となるは、夏期わずかの間に候）最も歴々と仰がるべく、夏にても、形は明確に、白雪山を埋むる今にても、こを恋人とせる小生の目には、同じ雪に蔽^{おほ}われながらも、この鳥形のみは粗き山の膚（元より白色）の中に、滑らかに平に浮び出で居候が、認められ候。

白峰の壯觀は、空氣澄水の如き朝、明らかにて、正午よりは、淡き水蒸氣^{さへぎ}に遮られ候、但し日光の工合にて、かえつて鳥だけは、朝よりも明瞭に仰がれ候（側は陰に入るより）、駒ヶ岳の孤峭^{こしやう}は、檜ヶ岳を忍ばせ、木食仙^{もくじき}の裸形の如く、雪の斑は、宛^{さなが}然^ら肋骨と頷^{うなず}かれ候、八ヶ岳も、少し郊外に出づれば、頭を現わすべく、茅岳、金岳より、近き山々、皆冬枯の薄紫にて、淡き三色版そのまま、御阪山脈の方向は富士山なくんば見るに足らず、富士の雪は夕陽に映るとき、最も美しく候、ここはなお雪がふらず、白峰^{おろし}風は大抵一日おき位に、午後より夕まで、または夕より十二時頃まで、凄^{すさ}まじき音をたて、この夜^{こんじく}坤軸を砕く大雪崩の、岩角より火花を迸^{ほうはつ}発する深山の景色を忍び居候。（十二月十八日甲府より）

別紙白峰の拙画は、今年初秋―四十年において、最も白峰を明瞭に仰ぎ得し日の午前
 写生せしものを、忠実に写し直せしものに御座候、赭色なるは雲なき頃とて、皺谷の
 赤膚を露出するもの、甚だ妙ならず候えども、スカイラインと共に、山の皺は、いか
 にも興多きため、忠実に岐脈をも余さざりしつもり候、中央に鳥形の赤裸なるを御
 覧あるべく、これが埴輪の鳥形に候なり、これには脚なくして、二股の尾あるを見給
 うべきも、この図は、雪なきときの切崖の露出にて、雪少しにても降れば、この尾は
 消えて、脚を生じ、例の埴輪の鳥の如き形となるに候、いずれにせよ、鶏ならずして、
 立派な水鳥、小生の大好きなスワン（伝説に最も縁多き）の形に仰がれ候、図中、鳥
 形の左なるへ形の山は、もと白峰つづきの山かと存ぜしに、曇日などに白峰見えずと
 も、この山明かなるにて、別峰なることを知り候、今日この山に、非常の降雪ありし
 ように候、雪降りては、農鳥より右は真白なれど、左は縦谷のみ白く仰がれ、膚は容
 易に、白くならぬように候。

これより右、地藏鳳凰を越えて、槍ヶ岳の駒ヶ岳と、峭立しては、絶景の極、駒と並
 べて見て、白峰は益す立派さを増すに候、農牛、農爺、蝶、白馬、これらが信甲駿の
 空に聳えて、相応ずる姿、鏡花の『高野聖』に、妖女が馬腹をくぐる時の文句に「周

囲の山々は羴々すくすくくちばしと嘴を揃え、頭を擡もたげて、この月下の光景を、朧おぼろ朧ろと覗のぞき込んだ」とやらありしを思い出で、何やら山に霊ありて、相語るが如く、身慄ふるいられ申候、昨夜は明月凄じきばかりなりしに、九時頃より一人、後の天守台に上り、夜霧の彼方に朧おぼろなる彼かの白色魔を眺め、氣のまよいか、白鳥のあたりだけは、鮮やかなるようの心地いたし候。(十二月二十九日)

その後もN君は、数葉のスケッチを送られた、N君が初めて物の本から読んで知った、農鳥の形を見つけ出して校堂に説くに至ってから、初めは信ぜざりし鳥形が、誰の目にも立派に分るようになり、七、八歳の小童から、中学生まで、往來を通るにも、西の大壁を仰向いて、足を緩めるようになった、初めはくさしていた大人も、南向きの白鳥の、優しく、長く、延べた頸の、曲線の美しさに、恍惚とすようになったという。

しかし農鳥山は、白峰の雪を代表したものではない、農鳥山は三山の中、最も南に寄っているから、雪は最も少量である、この神秘的な白鳥が消えても、間の岳あい、たけは白銀の条すじを入れている、間の岳は、登って見て解つたのであるが、全山裸出の懸崖と、絶壁とより成り、その上に一髪の山稜が北へと走っているので、焼刃の乱れたように、白くギラギラと輝い

ている、更に北岳は奥の奥だけあつて山の胸にかけて、一里以上もある、凝れる氷を幾筋か白く引いている、自分は北方の白馬岳で、氷河的雪の壯觀を説くのは、南の印度^{インド}で、ジヤングルの藪の美を説くのと同じく、当然と思つてゐる、しかしながら偉なる哉^{かな}、南方の雪！ 黒潮^{はし}奔れる太平洋の海風を受けて、しかもラスキンのいわゆる、アルプスの魔女が紡^{つむ}げる、千古の糸にも似た雪の白い山！ 讃嘆せよ、讃嘆せよ、太平洋岸の表日本には、東に富士あり、西に我白峰がある。

N君からは——ちようど亜米利加人^{アメリカ}が、ルーズベルトの一挙一動を、電報で知らせてよこすように、白峰山脈の一陰一晴を知らせて来る、「一昨日朝、初めて西山一帯に降雪あり、今晚半時ばかり、日出前——日出——日出後の山と、その空との、色彩の変化を観察す」（十一月十七日）とある、そうかと思うと「灰汁^{あく}のような色の雪雲、日に夜叉神^{やしゃじん}（峠の名）のあたりより、鳳凰、地蔵より縞目^なを作して立ち昇り、白峰を見ざること久し」（十二月十七日）と渴^{かつ}えた情を懇^{うった}えて来る、「甲州は今雪の王国に御座候、四囲の山々、皆雪白、地蔵鳳凰の兀立^{こつりつ}、殊に興趣あり、また雪ある山々の、相互の陰翳、頗る面白く候、東の方の山々の中、夕日の加減にて、或山のみ常は凡々たるが、真紅に、鮮やかに浮き立つことあり、珍しく人目を惹^ひくさま、何かの象徴の如くに候」（一月十九日）と物思

わせることもある、真夏の夕暮に、下のようなハガキも、舞い込んだ。「極暑九十七度九分、山々に未だ雪あるに呆れ候、一昨夕、稀なる夕映、望遠鏡にて西山一帯を眺めいたるところ、駒ヶ岳の絶^{ぜってん}巔、地蔵の頭、間の岳、農鳥の絶頂なる、各三角測量標を、歴々と発見いたし候」(七月十八日)、この時の感じは、何だか自分が観て、N君に知らせているような気がした。

秋も末になった、白峰の山色を想っていると、N君から、馬上の旅客を描いた端書が来た。

この月に入りては、甲斐が根風一万尺余の絶巔より吹きなぐるに、目もあかれず、月の末あたりよりは、山男の鹿の片股、兎、猪の肉など、時々遙々とひさぎに参るべき由、さあらば、熊の皮の胴服などに、久しく無沙汰の芝居気取など致して見ばやと笑い居候、天長節より時雨つづき、雨やや上りて、雲がなき日の雪ある山の眺め、都人の想像及ばざるところに候、地蔵、鳳凰の淡き練^{ねりぎぬ}絹纏いし姿は、さもあらばあれ、白峰甲斐駒の諸峰は、更に山の膚を見ず、ただ峻谷の雪かすかなる、隴銀の色をなし、鉛色なる空より浮き出で巨大なる蛇の舌閃^{ひらめ}いて、空に躍れる如し、何等のミレー

ジ、何等のミラクル、今朝はやや晴れ、白峰満山の白雪、朝日に映じて瑤瑤に金を含
 む、群山黙として黒く下に参す、富士も大なる白色魔の如く、鈍き空に懸れり、兄を
 招じて驚嘆の叫び承わり度候、山を見ては、兄を思う、昨日今日の壮觀黙つて居られ
 ず、かくは

冬近き山家や屋根の石の数

(十一月六日)

これを読まされると、自分はもう堪^{たま}らなくなる、ふと目を挙げて「北に遠ざかりて雪白
 き山あり……」……、往きたいなあと、拳^{こぶし}に力を入れて、机をトンと叩いた。

青空文庫情報

底本：「山岳紀行文集 日本アルプス」岩波文庫、岩波書店

1992（平成4）年7月16日第1版発行

1994（平成6）年5月16日第5刷発行

底本の親本：「小島烏水全集」全14巻、大修館書店

1979（昭和54）年9月～1987（昭和62）年9月

入力：大野晋

校正：地田尚

1999年11月25日公開

2005年12月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の白峰

小島鳥水

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>